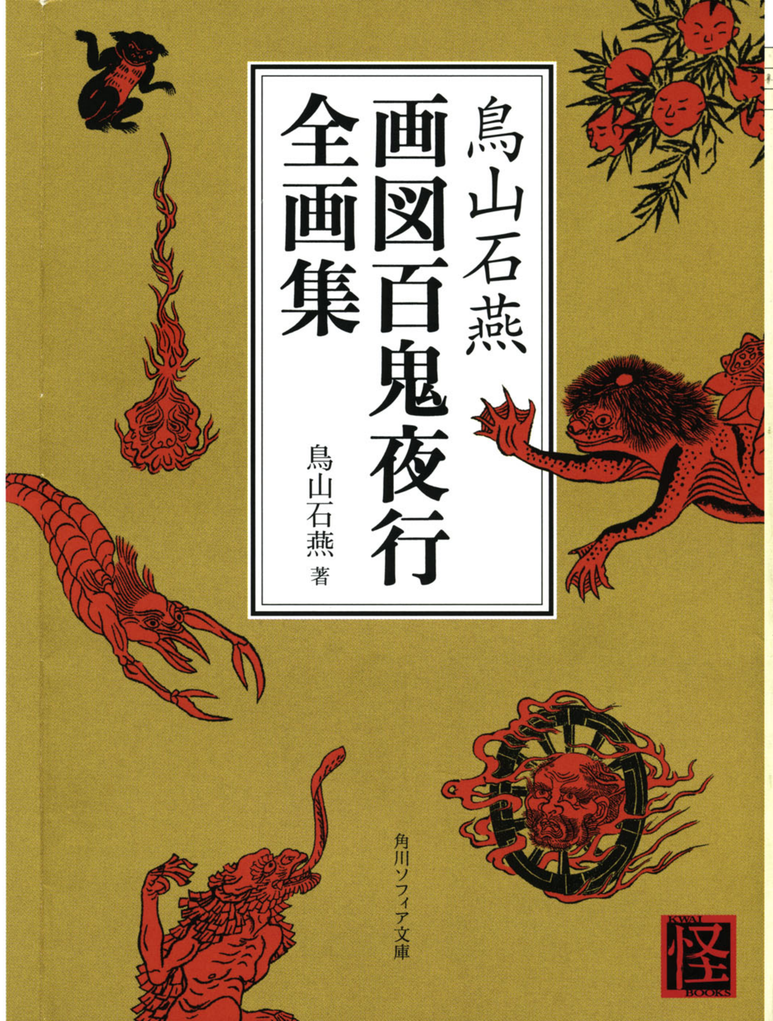
鳥山石燕／とりやま せきえん

正徳二年(1712年)～天明八年(1788年)、江戸の人。本名は佐野豊房。狩野派の絵師で、妖怪画を好んで描いた。その豊かな想像力で描かれた妖怪たちは、現代にいたるまで妖怪画家たちに大きな影響を与えてきた。

装画／鳥山石燕
(川崎市市民ミュージアム、東北大学附属図書館所蔵)



SP
319
Y667

鳥山石燕

鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集

角川ソフィア文庫

9784044051013

ISBN4-04-405101-1

C0195 ¥667E

定価：本体667円(税別)

1920195006672

かまいたち、火車、姑獲鳥(うぶめ)、ぬらりひょん、狂骨……現代の小説や漫画でおなじみの妖怪たち。その姿形をひたすら描いた江戸の絵師がいた。あふれる想像力と類いまれなる画力で、さまざまな妖怪の姿を伝えた鳥山石燕の妖怪画集全点を、コンパクトな文庫一冊に収録！
(解説・多田克己)

カバー　泉文社

鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集

鳥山石燕

角川文庫 13881

鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集
鳥山石燕
角川文庫
13881

鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集

鳥山石燕

角川文庫 13881

鳥山石燕　画図百鬼夜行全画集

もくじ

画図百鬼夜行　七
陰　九
陽　二五
風　四九
今昔画図続百鬼　六七
雨　七一
晦　八七
明　一〇九

今昔百鬼拾遺　一三一
雲　一三五
霧　一五三
雨　一七三
百器徒然袋　一九一
上　一九三
中　二一一
下　二三三
解説　多田克己　二五一
索引　二五五

画図百鬼夜行

序文

凡物の化するや、石の燕となり筆の蟋蟀となるもの、画にあそぶこと年あり。その筆亦よく化して、森羅万象なさずといふものなし。さきに鳥山彦を著し、世人しる処なり。今はた古画の百鬼夜行に拠て意を加へ容を補ふ。書肆あり、はやく見とゞめて梓に寿せんことをこふ。授るに至て六巻となし、陰陽風雨晦明をもてわかつ。其まゝに画図百鬼夜行と題し、已に前編三冊成ぬ。こゝに於ゐて序を予にもとむ。燕は俳歌の友にして相識ことひさしければ、辞におよばず。たゞ怪力乱神をかたらざるのいましめをまもる人には、いさゝか瞻を避るのおもひなきにしもあらざるのみ。

安永龍歳乙未冬東都隠士紫陽主人老蚕

陰

○木魅（こだま）
○天狗（てんぐ）
○幽谷響（やまびこ）
○山童（やまわらわ）
○山姥（やまうば）
○犬神（いぬがみ）
○白児（しらちご）
○猫又（ねこまた）
○河童（かっぱ）
○獺（かわうそ）
○垢嘗（あかなめ）
○狸（たぬき）
○窮奇（かまいたち）
○網剪（あみきり）
○狐火（きつねび）





木魅（こだま）

百年の樹には神ありてかたちをあらはすといふ。





天狗（てんぐ）



幽谷響（やまびこ）



山童（やまわらわ）



山姥
やま　うば



犬神・白児
（いぬがみ　しらちご）



猫（ねこ）また



河童（かつぱ）

川太郎ともいふ。



かわうそ

獺



あか　なめ
垢嘗



狸（たぬき）



窮奇（かまいたち）



網剪(あみきり)



狐火（きつねび）

陽

○絡新婦（じょろうぐも）
○鼬（てん）
○叢原火（そうげんび）
○釣瓶火（つるべび）
○ふらり火（ひ）
○姥が火（うばがひ）
○火車（かしゃ）
○鳴屋（やなり）
○姑獲鳥（うぶめ）

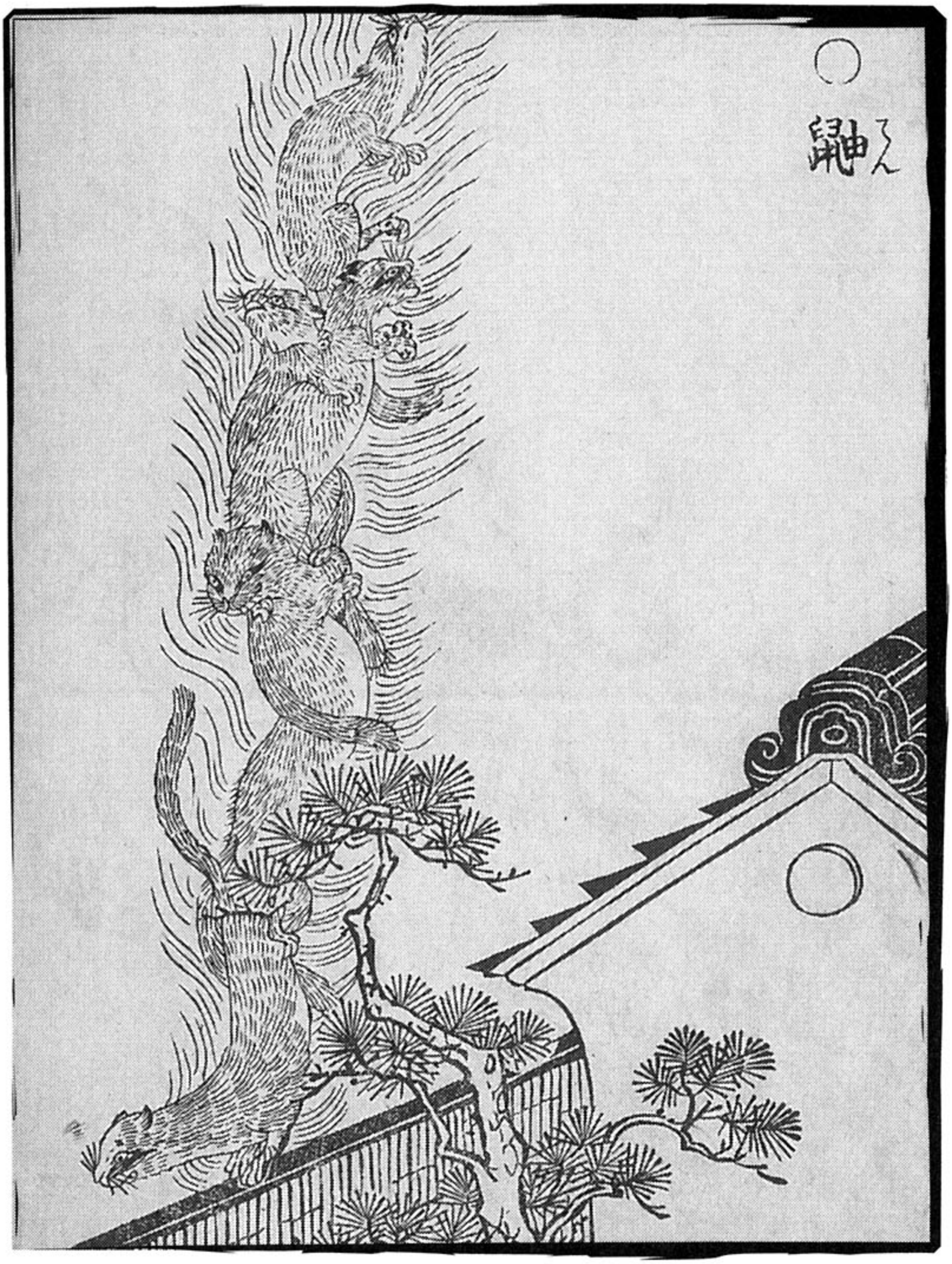
○海座頭（うみざとう）
○野寺坊（のでらぼう）
○高女（たかじょ）
○手の目（てのめ）
○鉄鼠（てっそ）
○黒塚（くろづか）
○飛頭蛮（ろくろくび）
○逆柱（さかはしら）
○反枕（まくらかえし）

○雪女（ゆきおんな）
○生霊（いきりょう）
○死霊（しりょう）
○幽霊（ゆうれい）





絡新婦（じょろうぐも）



鼬（てん）



叢原火（そうげんび）

洛外西院の南、壬生寺のほとりにあり。俗これを朱雀の宗源火といふ。



釣瓶火（つるべび）



ふらり火

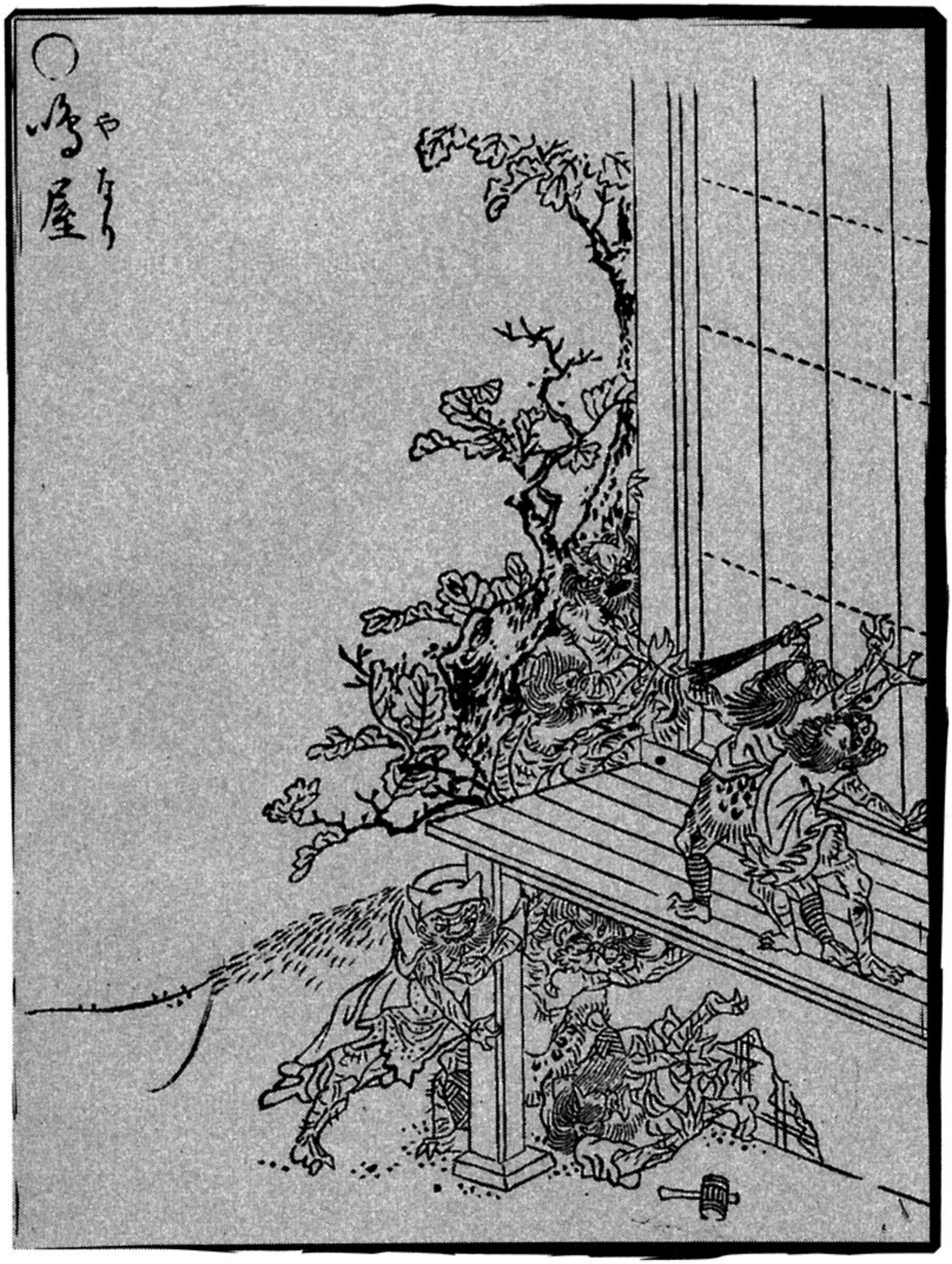


姥(うば)が火(ひ)

河内国にありといふ。



火車（かしや）



鳴屋（やなり）



姑獲鳥（うぶめ）



海座頭（うみざとう）



野寺坊（のでらぼう）



高女（たかじょ）



手の目（てめ）



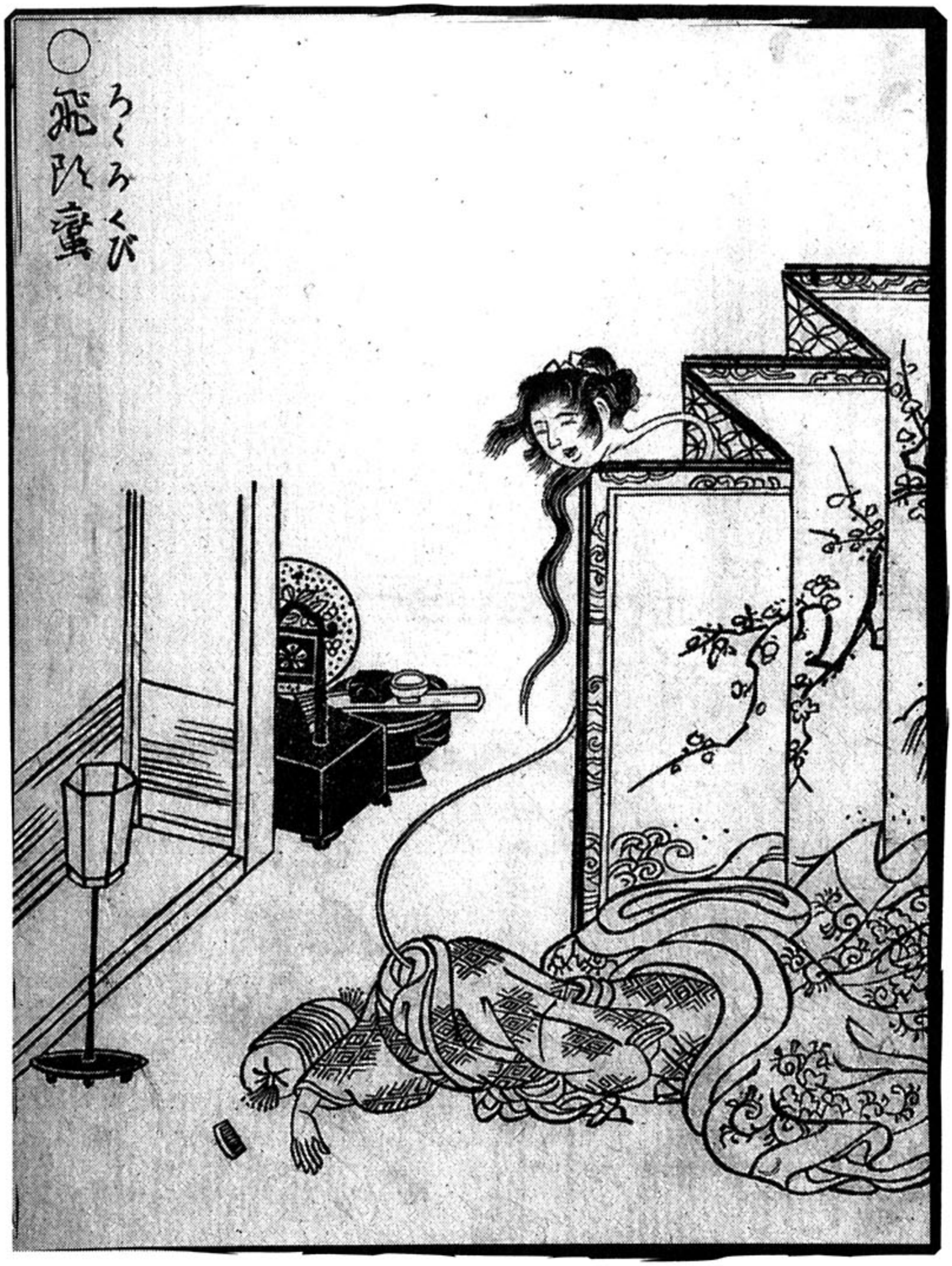
鉄鼠

頼豪の霊鼠と化と、世にする所也。



黒塚（くろづか）

奥州安達原にありし鬼。古歌にもきこゆ。



飛頭蛮（ろくろくび）



逆柱（さかばしら）



反枕（まくらがえし）



雪女（ゆきおんな）



生霊（いきりょう）



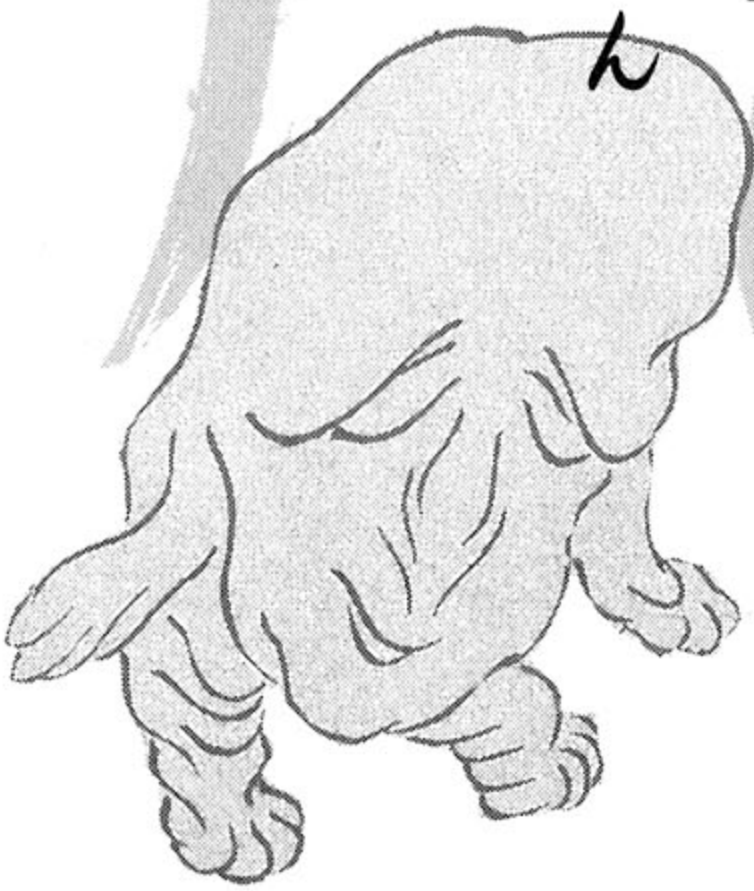
死霊（しりょう）



幽霊（ゆうれい）

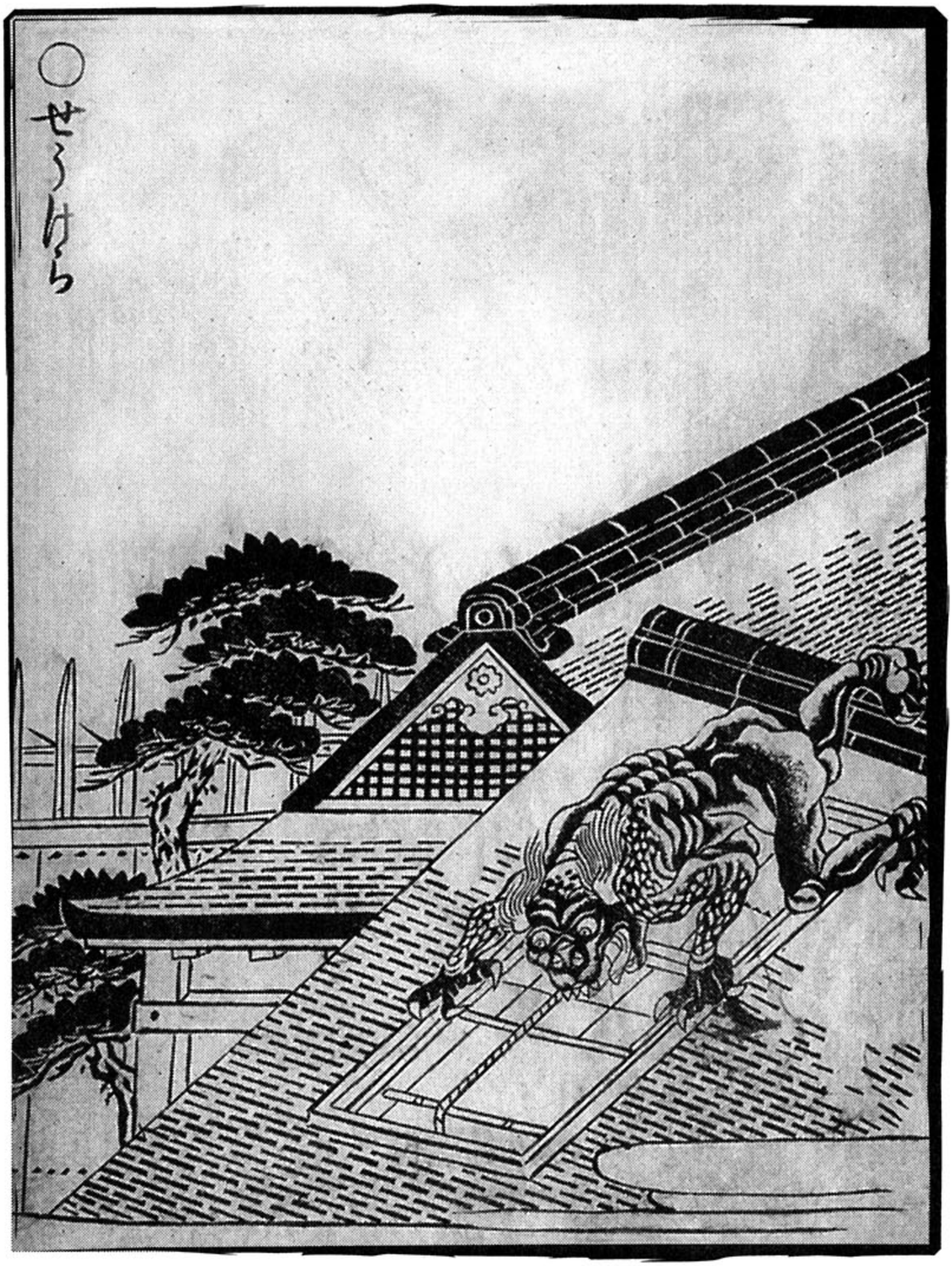
風

- 見越（みこし）
- しょうけら
- ひょうすべ
- わいら
- おとろし
- 塗仏（ぬりぼとけ）
- 濡女（ぬれおんな）
- ぬらりひょん
- 元興寺（がごぜ）
- 芋（お）うに
- 青坊主（あおぼうず）
- 赤舌（あかした）
- ぬっぺっぽう
- 牛鬼（うしおに）
- うわん





見越（みこし）



しょうけら



○ひょうすべ

ひょうすべ



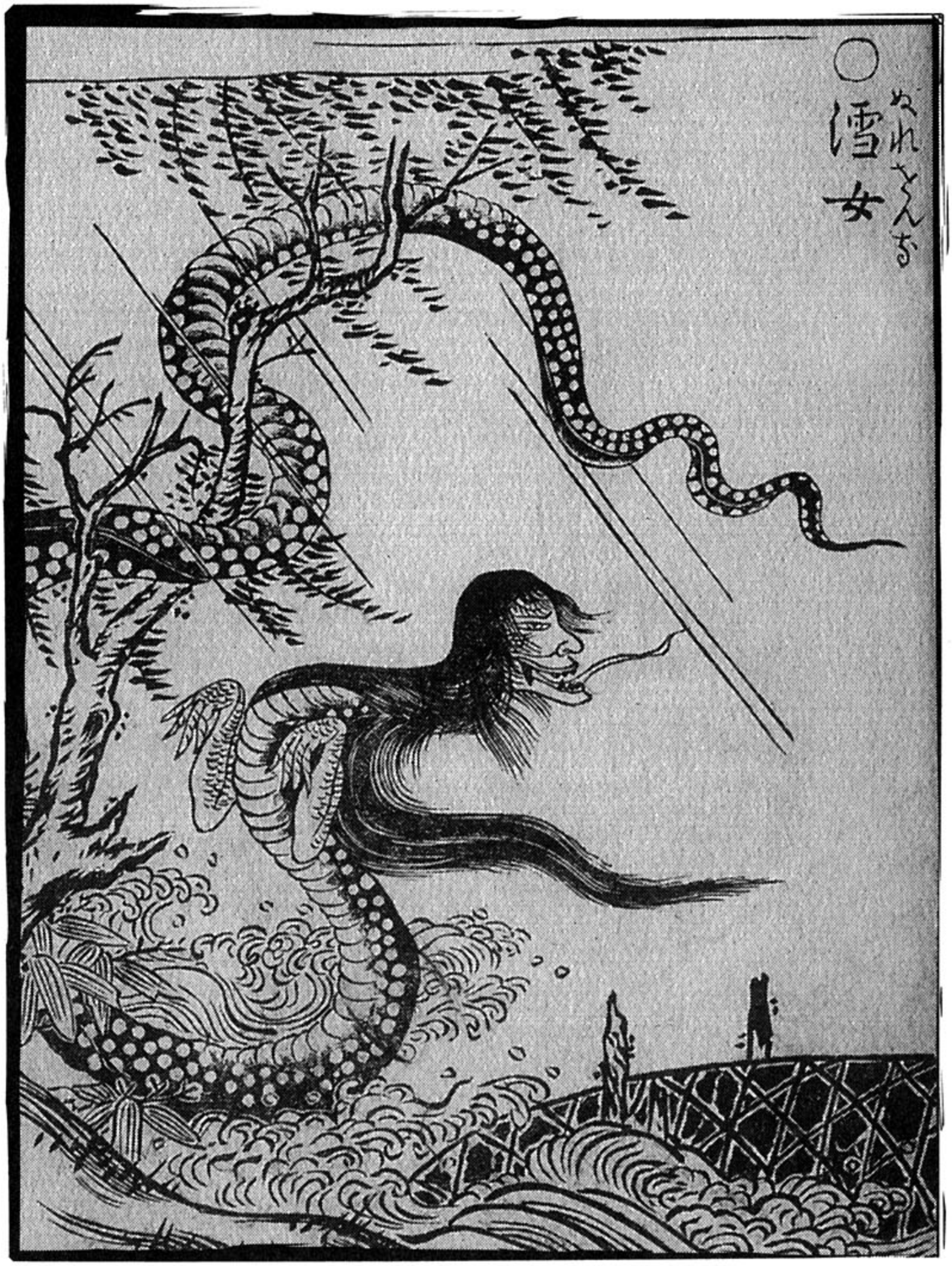
わいら



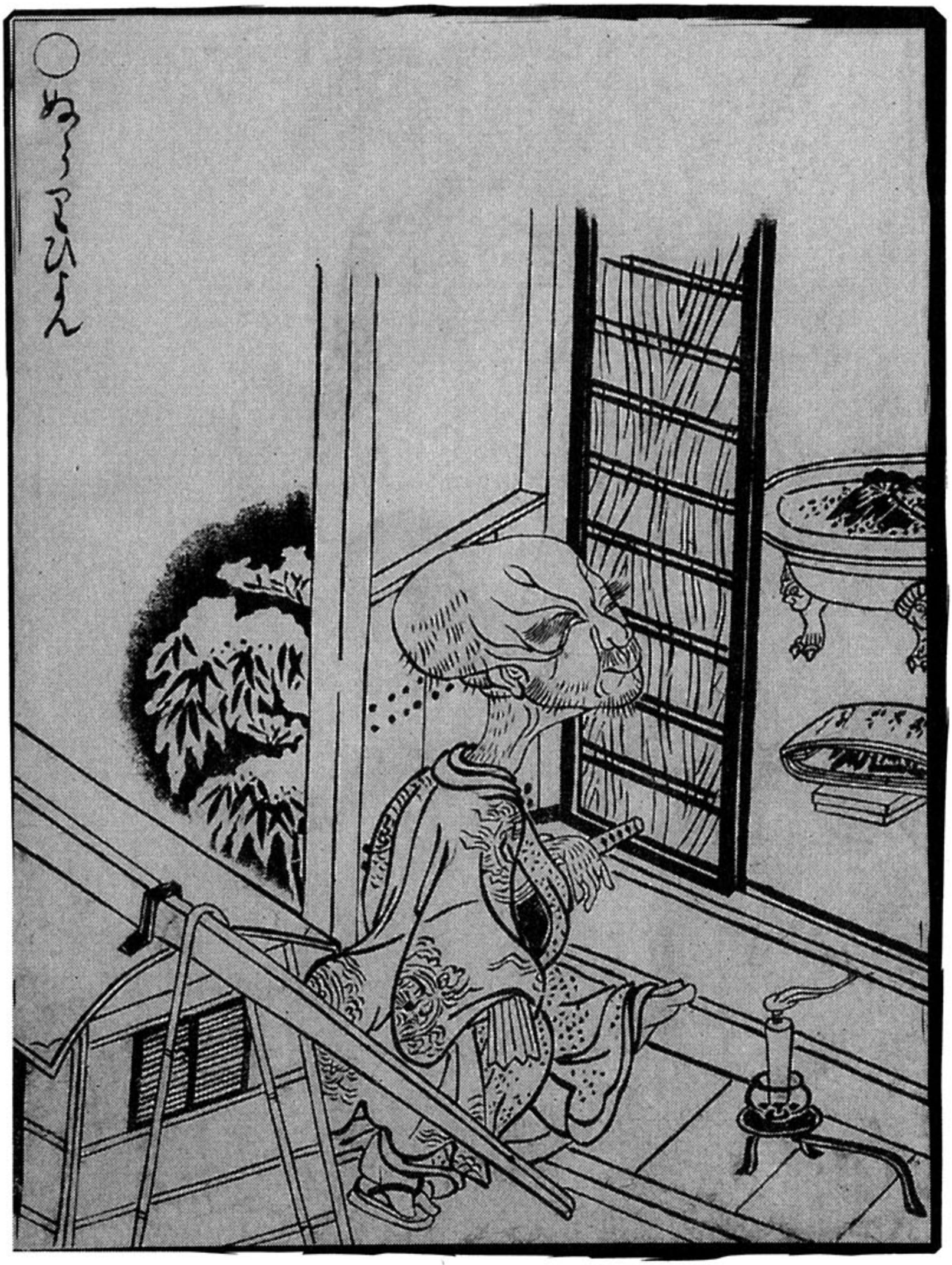
おとろし



塗仏（ぬりぼとけ）



濡女（ぬれおんな）



ぬらりひょん

画図百鬼夜行……五八



○元興寺（ごぜ）

元興寺（がごぜ）



芋(お)うに



青坊主（あおぼうず）



赤舌（あかした）



ぬっぺっぽう



牛鬼（うしおに）



うわん

跋文

詩は人心の物に感じて声を発するところ、画はまた無声の詩とかや。形ありて声なし。そのことぐ〳〵により て情をおこし感を催す。さればもろこしに山海経吾朝に元信の百鬼夜行あれば、予これに学てつたなくも紙筆を汚す。ときに書林何某需るに頻なれば、いなみがたくて桜木にうつしぬ。よしそれ童蒙の弄ともならんかし。

きのとの未の秋菊月於月窓下石燕自跋

今昔画図続百鬼

百鬼夜行題辞

曰維(こゝに)絵事を覿に、墨画に由して丹青を生ず。是れ猶を大篆に由して而して八分を生じ、結縄よりして而して六経有るがごとし。夫れ書と画とは厥の体を同ふして、倶に文房の雅具なり。然して古の人にして古への画を画くに、厥の雅を要せずして焉に自ら雅なり。今の人にして古の画を写す、尤も其の俗なり易きを患ふるのみ。茲用(こゝをもつて)世其の画を善くして伝神の妙に至る者を得難し。属(このごろ)都下の画人石燕なる者、画譜三巻を著す。命けて百鬼夜行と曰ふ。詮虎を介として余に告げて曰く、願くは師の題言を得て以て之を木にせんと。燕子は余未だ其の面を識らずと雖も、余と詮虎と善し。因て諾す。余時に疥作(をこりをこつ)て伏すと雖も、力(つとめ)て目を寓することを獲たり。乃ち嘆じて曰く、美なる哉、燕子が枝（技を）為す、一に此の極に至ることや。奇なることは則ち驢を画て僧を悩す。逸ることは乃ち筆を誤りて牛を成す。況や此の譜、其の変態（態）百体、細閲するに一々観を改む。廼ち多日の癉熱を一洗することを覚ふ。謂つべし、手に得、心に応じて精妙に至る者なりと。余素より絵の事若しくは六法を知る者に匪ず。然りと雖ども、試に此を以て古の画譜と云ふ者に方ぶるに、筆の精しきこと孔之(はなはだ)惟れ肖たり。是に於て知んぬ、燕子が此の芸に於ける庸庸の人に同じからざることを。世の茲の技に精しき輩ら概見して曙すべし。

時に
安永戊戌季秋の日
頑菴道人東都日莫里吉祥林の穿牛観に題す。

序……六九

もゝの鬼のよる行有さま、ふるき世よりつたへて上手どものうつしたる、家〳〵にひめをけるを、人の需にてをろかなる筆にも写し侍りし。目に見えぬ鬼のかほをおどろ〳〵しく書出ぬる事は、じちにはいたらめど、人の目おどろかす斗の事も有ぬべしと、めづらかにけうときかたちどもをたはぶれのてに又かきこゝろみ侍ぬ。されどかゝる絵たび〳〵書るをめでゝ誠の鬼などのあらはれいでば、何がしが龍のたつひにいかばかりおそろしかりなんとかい撫侍るを、書の林のあるじが見いでゝ、さきのとしの一巻につがんとせちに乞侍れば、いなみがたくてこれを上るといふ事を、鳥山石燕みづから毫を月窓のもとにとる。

雨

- 逢魔時（おうまがとき）
- 鬼（おに）
- 山精（さんせい）
- 魍魎（ひてりがみ）
- 水虎（すいこ）
- 覚（さとり）
- 酒顛童子（しゅてんどうじ）
- 橋姫（はしひめ）
- 般若（はんにや）
- 寺つつき（てら）
- 入内雀（にゅうないすずめ）
- 玉藻前（たまものまえ）
- 長壁（おさかべ）
- 丑時参（うしのときまいり）





逢魔時（おうまがとき）

黄昏（たそがれ）をいふ。百魅（ひやくみ）の生（せう）ずる時なり。世俗（せぞくせうに）小児を外にいだす事を禁（いまし）む。一説に王莽時（せつわうもがとき）とかけり。これは王莽前漢（わうもうぜんかん）の代を簒（うば）ひしかど、程（ほど）なく後漢（ごかん）の代となりし故、昼夜（ちうや）のさかひを両漢（りやうかん）の間に比（ひ）してかくいふならん。

逢魔時

茅盈をいふ百魅
乃生ずる時なり
世俗小児を外
へいざとするを
梅ふむ一説
なり王莽時とかや
これハ王莽前漢の代を
簒ひしと後多く後漢
の代となりし故也
乃さひを支漢のろよ
びしくいふなん



鬼（おに）

世に丑寅の方を鬼門といふ。今鬼の形を画くには、頭に牛角をいたゞき腰に虎皮をまとふ。是丑と寅との二つを合せて、この形をなせりといへり。



山精

もろこし安国県に山鬼あり。人の如くにして一足なり。伐木人のもてる塩をぬすみ、石蟹を炙りくらふと、永嘉記に見えたり。



ひでりがみ

魃

一名を旱母（かんぼ）といふ。もろこし剛山（がうざん）にすめり。その状、人面（かたち ひとのおもて）にして獣身（けものゝみ）なり。手一つ足（あし）一つにして走（はし）る事、風（かぜ）の如し。凡此神出る時は旱（ひでり）して雨ふる事なし。



水虎

水虎はかたち小児のごとし。甲は鯪鯉のごとく、膝頭虎の爪に似たり。もろこし涿水の辺にすみて、つねに沙の上に甲を曝すといへり。



覚（さとり）

飛弾美濃の深山に獲あり。山人呼で覚と名づく。色黒く毛長くして、よく人の言をなし、よく人の意を察す。あへて人の害をなさず。人これを殺さんとすれば、先その意をさとりてにげ去と云。



酒顛童子

大江山いく野の道に行かふ人の財宝を掠とりて、積たくはふる事山のごとし。輟耕録にいはゆる鬼贓の類なり。むくつけき鬼の肘を枕とし、みめよき女にしやくとらせ、自ら大 盃をかたぶけて楽めり。されどわらは髪に緋の袴きたるこそやさしき鬼の心なれ。末世に及んで白衣の化物 出と聖教にも侍るをや。



橋姫（はしひめ）

橋姫（はしひめ）の社は山城（やしろ）の国宇治橋（くにうぢ）にあり。橋姫はかほかたちいたりて醜（みにく）し。故に配偶（はいぐう）なし。ひとりやもめなる事をうらみ、人の縁辺（ゑんぺん）を妬（ねたみ）給ふと云。



般若（はんにや）

般若（はんにやきやう）は経の名にして苦海（くかい）をわたる慈航（じかう）とす。しかるにねためる女の鬼（おに）となりしを般若面（はんにやめん）といふ事は、葵（あふひ）の上（うへ）の謡（うたひ）に、六条（でう）のみやす所の怨霊行者（おんりやうぎやうじや）の経（きやう）を読誦（どくじゆ）するをきゝて、あらおそろしのはんにや声（ごゑ）やといへるより転（てん）じて、かくは称（せう）せしにや。



寺つつき

物部大連守屋は仏法をこのまず、厩戸皇子のためにほろぼさる。その霊一つの鳥となりて、堂塔伽藍を毀たんとす。これを名づけて、てらつゝきといふとかや。



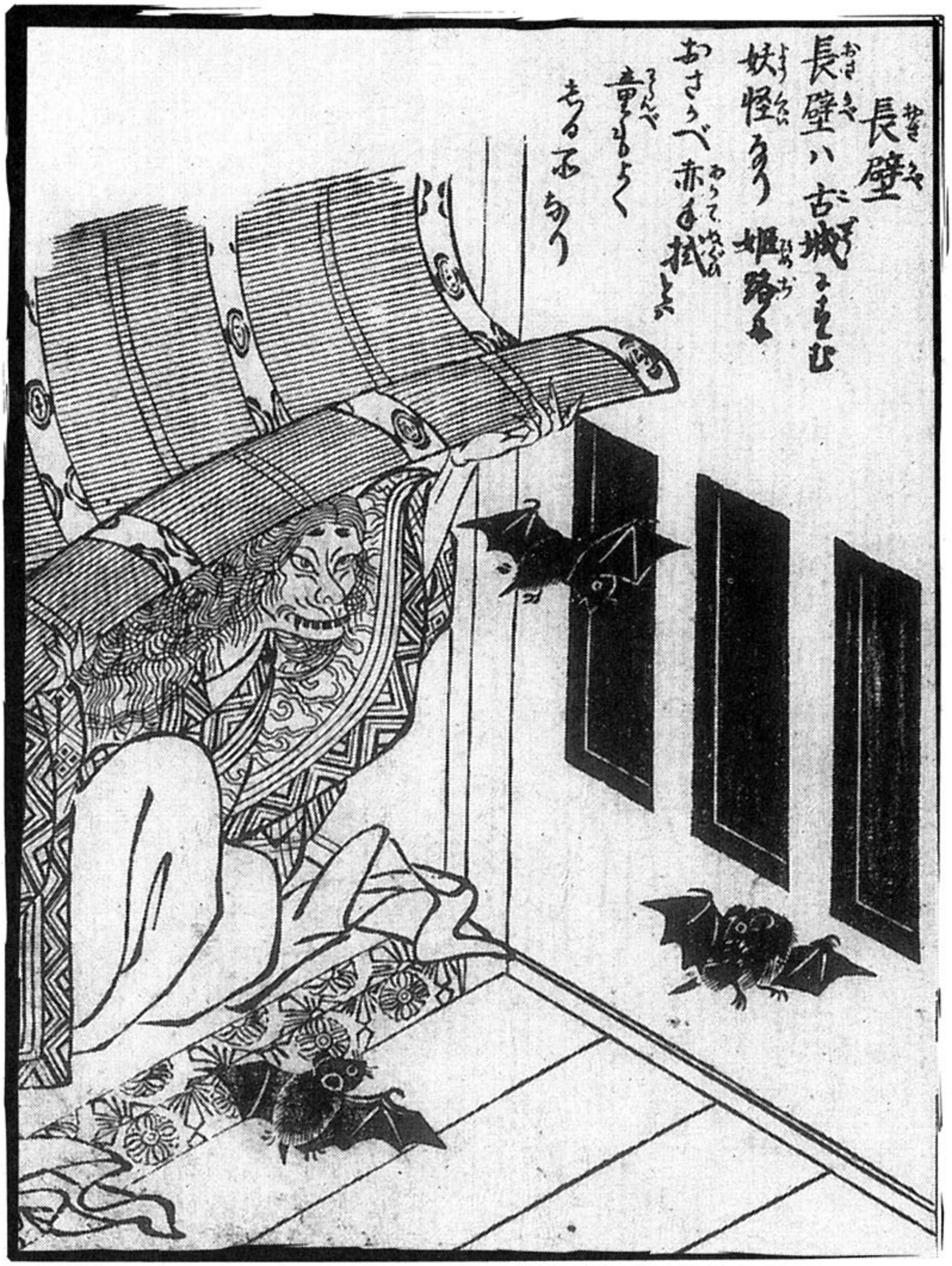
入内雀（にゆうないすずめ）

藤原実方（ふぢはらのさねかた）奥州に左遷（おうしうさせん）せらる。その一念雀（ねんすゞめ）と化（け）して大内に入り、台盤所（だいばんどころ）の飯（いひ）を啄（ついばみ）しとかや。是を入内雀（にうないすゞめ）と云。



玉藻前

瑯邪代酔に古今事物考を引て云、商の妲己（己）は狐の精なりと云々。その精本朝にわたりて玉藻前となり、帝王のおそばをけがせしとなん。すべて淫声美色の人を惑す事、狐狸よりもはなはだし。



長壁（おさかべ）

長壁（おさかべ）は古城（こぜう）にすむ妖怪（ようくはい）なり。姫路（ひめぢ）におさかべ赤手拭（あかてぬぐひ）とは童（わらんべ）もよくしる所なり。



丑時参（うしのときまいり）

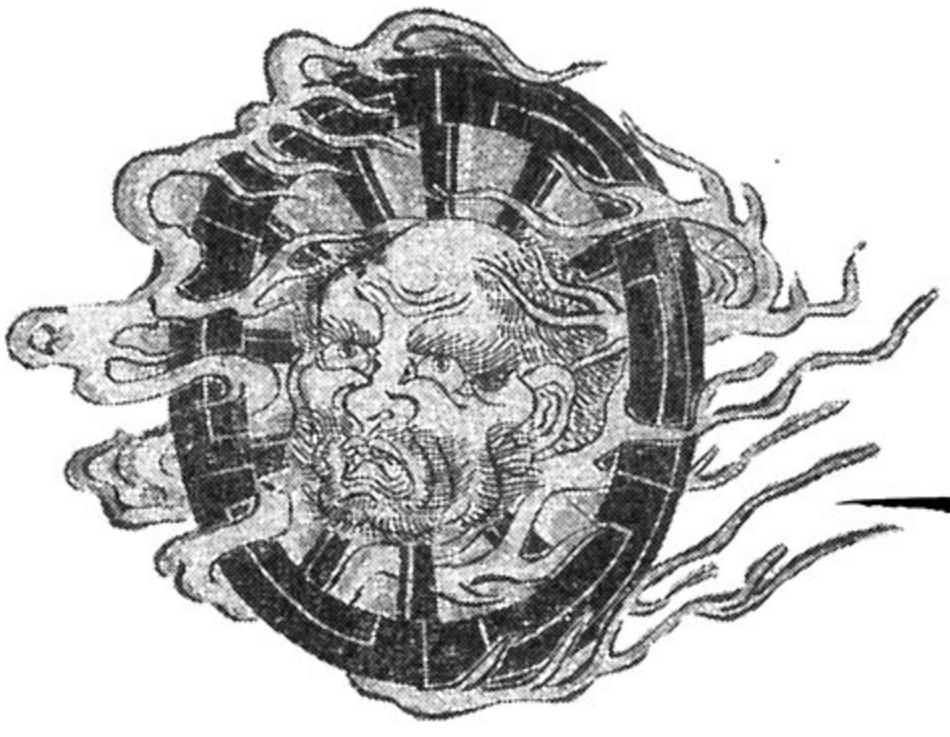
丑時まいりは胸に一つの鏡をかくし、頭に三つの燭を点じ、丑みつの比神社にまうで、杉の梢に釘うつとかや。はかなき女の嫉妬より起りて人を失ひ身をうしなふ。人を呪咀ば穴二つほれとはよき近き譬ならん。

晦

○不知火
○古戦場火
○青鷺火
○提灯火
○墓の火
○火消婆
○油赤子
○片輪車
○輪入道

○陰摩羅鬼
○四かぞえ
○人魂
○舟幽霊
○川赤子
○古山茶の霊
○年波理入道
○雨降小僧
○日和坊

○青女房
○毛倡妓
○骨女





不知火（しらぬい）

筑紫（つくし）の海（うみ）にもゆる火ありて、景行天皇（けいこうてんわう）の御船（みふね）を迎（むかへ）しとかや。されば歌（うた）にもしらぬひのつくしとつゞけたり。



古戦場火

一将功なりて万骨かれし枯野には、燐火とて火のもゆる事あり。是は血のこぼれたる跡よりもえ出る火なりといへり。



青鷺火（あおさぎのひ）

青鷺（あをさぎ）の年を経（へ）しは、夜飛（よるとぶ）ときはかならず其羽（はね）ひかるもの也。目の光に映（えい）じ觜（くちばし）とがりてすさまじきと也。



提灯火（ちようちんび）

田舎（いなか）などに提灯火（てうちんひ）とて畔道（あぜみち）に火のもゆる事あり。
名にしおふ夜（よる）の殿（との）の下部（しもべ）のもてる提灯（てうちん）にや。

墓の火

去るものは日々にうとく、生ずるものは日々にしたし。古きつかは犁れて田となり、しるしの松は薪となりても、五輪のかたちありありと陰火のもゆる事あるはいかなる執著の心ならんかし。



墓の火



火消婆（ひけしばば）

それ火（ひ）は陽気（やうき）なり。妖（よう）は陰気（いんき）なり。うば玉の夜（よ）のくらきには、陰気（いんき）の陽気（やうき）にかつ時なれば、火（ひ）消（け）しばゞもあるべきにや。



油赤子（あぶらあかご）

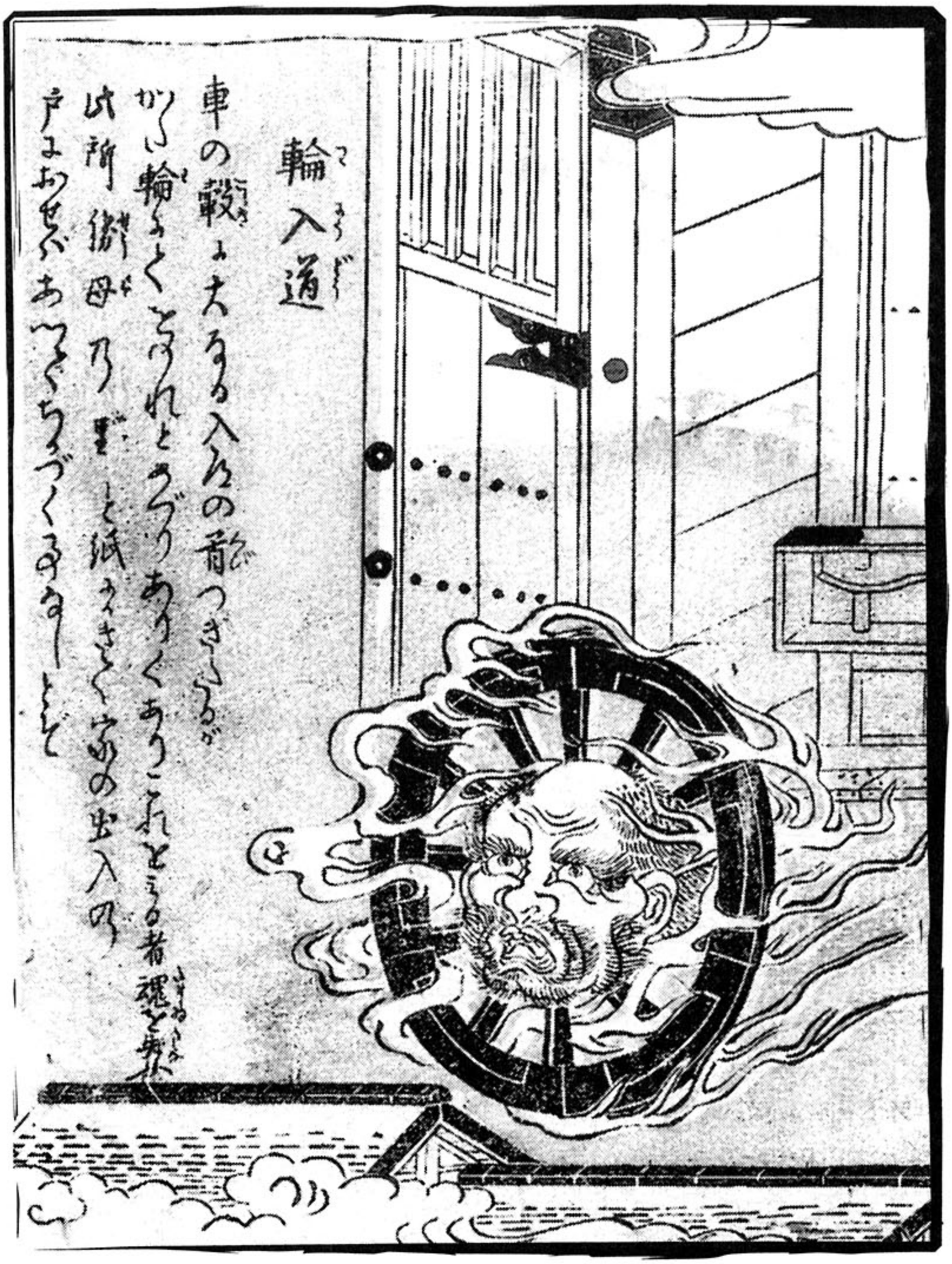
近江国（あふみのくに）大津の八町に玉のごとくの火飛行（ひぎやう）する事あり。土人云、むかし志賀の里に油をうるものあり、夜毎（よごと）に大津辻（つぢ）の地蔵の油をぬすみけるが、その者死（し）て魂魄炎（こんぱくほのほ）となりて今に迷（まよ）ひの火となれるとぞ。しからば油をなむる赤子は此ものゝ再生（さいせい）せしにや。



片輪車（かたわぐるま）

むかし近江国甲賀郡（あふみのくにかうがごほり）によなよな大路（おほぢ）を車（くるま）のきしる音（おと）しけり。ある人戸のすき間よりさしのぞき見るうちに、ねやにありし小児（せうに）いづかたへゆきしか見えず。せんかたなくてかくなん、

つみとがはわれにこそあれ小車のやるかたわかぬ子をばかくしそ。その夜（よ）女のこゑにて、やさしの人かな、さらば子をかへすなりとてなげ入レける。そのゝちは人おそれてあへてみざりしとかや。



輪入道

車の轂に大なる入道の首つきたるが、かた輪にてをのれとめぐりありくあり。これをみる者魂を失ふ。此所勝母の里と紙にかきて家の出入の戸におせば、あへてちかづく事なしとぞ。



陰摩羅鬼

藏経の中に、初て新なる屍の気変じて陰摩羅鬼となる、と云へり。そのかたち鶴の如くして、色くろく目の光ともしびのごとく羽をふるひて鳴声たかし、と清尊録にあり。



皿かぞえ

ある家の下女十の皿を一つ井におとしたる科によりて害せられ、その亡魂よなよな井のはたにあらはれ、皿を一より九までかぞへ十をいはずして泣叫ぶといふ。此古井は播州にありとぞ。



人魂

骨肉は土に帰し、魂気の如きはゆかざることなし。見る人速に下がへのつまをむすびて招魂の法を行ふべし。



舟幽霊

西国または北国にても、海上の風はげしく浪たかきときは、波の上に人のかたちのものおほくあらはれ、底なき柄杓にて水を汲事あり。これを舟幽霊といふ。これはとわたる舟の楫をたえて、ゆくえもしらぬ魂魄の残りしなるべし。



川赤子（かわあかご）

山川のもくずのうちに、赤子のかたちしたるものあり。これを川赤子といふなるよし。川太郎、川童（わらは）の類ならんか。



古山茶の霊（ふるつばきのれい）

ふる山茶（つばき）の精怪（せいあや）しき形（かたち）と化（け）して、人をたぶらかす事ありとぞ。すべて古木（こぼく）は妖（よう）をなす事多し。



加牟波理入道

大晦日の夜、厠にゆきて、がんばり入道郭公、と唱ふれば、妖怪を見ざるよし、世俗のしる所也。もろこしにては厠神の名を郭登といへり。これ遊天飛騎大殺将軍とて、人に禍福をあたふと云。郭登郭公同日の談なるべし。



雨降小僧（あめふりこぞう）

雨のかみを雨師（うし）といふ。雨（あめ）ふり小僧（こぞう）といへるものは、めしつかはるゝ侍童（じどう）にや。



日和坊（ひよりぼう）

常州（じやうしう）の深山（しんざん）にあるよし。雨天（うてん）の節は影（かげ）見えず。日和（ひより）なれば形（かたち）あらはるゝと云。今婦人女子（ふじんぢよし）てる法師といふものを紙にてつくりて晴（はれ）をいのるは、この霊（れい）を祭（まつ）れるにや。



青女房（あおにようぼう）

荒（あれ）たる古御所（ふるごしよ）には青女房とて女官（にようくはん）のかたちせし妖怪（ようくはい）、ぼうぼうまゆに鉄漿（かね）くろぐろとつけて、立まふ人をうかゞふとかや。


毛倡妓
ある風流士うかれ女のもとにかよひけるが、高
楼のれんじの前にて女の髪うちみだしたるうし
ろ影をみてその人かと前をみれば、額も面も一
チめんに髪おひて、目はなもさらにみえざりけり。おどろきてたえいりけ
るとなん。



骨女（ほねおんな）

これは御伽（おとぎ）ばうこに見えたる年ふる女の骸骨（がいこつ）、牡丹（ぼたん）の燈籠（とうらう）を携（たづさ）へ、人間（にんげん）の交（まぢはり）をなせし形（かたち）にして、もとは剪燈新話（ぜんとうしんわ）のうちに牡丹燈記（ぼたんとうのき）とてあり。

明

○鵺　○以津真天　○邪魅　○魍魎　○貉　○野衾　○野槌　○土蜘蛛

○比々　○百々目鬼　○震々　○骸骨　○天井下　○大禿　○大首　○百々爺

○金霊　○天逆毎　○日の出





鵺

鵺は深山にすめる化鳥なり。源三位頼政、頭は猿、足手は虎、尾はくちなはのごとき異物を射おとせしに、なく声の鵺に似たればとて、ぬえと名づけしならん。



以津真天（いつまで）

広有（ひろあり）、いつまでいつまでと鳴（なき）し怪鳥（けてう）を射（ゐ）し事、太平記（たいへいき）に委（くは）し。



邪魅（じゃみ）

邪魅（じゃみ）は魑魅（ちみ）の類（たぐひ）なり。妖邪（ようじゃ）の悪気（あくき）なるべし。



魍魎

形 三歳の小児の如し。色は赤黒し。目赤く、耳長く、髪うるはし。このんで亡者の肝を食ふと云。



貉

貉の化る事をさをさ狐狸におとらず。ある辻堂に、年ふるむじな僧とばけて六時の勤おこたらざりしが、食後の一睡にわれを忘れて尾を出せり。



野猋

野猋は鼯の事なり。形蝙蝠に似て、毛生ひて翅も即肉なり。四の足あれども短く爪長くして、木の実をも喰ひ、又は火焔をもくへり。



野槌（のづち）

野槌（のづち）は草木の霊（れい）をいふ。又沙石集（させきしふ）に見えたる野づちといへるものは、目も鼻（はな）もなき物也といへり。



土蜘蛛

源頼光土蜘蛛を退治し給ひし事、児女のしる所也。



比々（ひひ）

ひゝは山中（さんちう）にすむ獣（けもの）にして、猛獣（もうじう）をとりくらふ事、鷹（たか）の小鳥をとるがごとしといへり。



百々目鬼（どどめき）

函関外史云、ある女生れて手長くして、つねに人の銭をぬすむ。忽腕に百鳥の目を生ず。是鳥目の精也。名づけて百々目鬼と云。外史は函関以外の事をしるせる奇書也。一説にどゞめきは東都の地名ともいふ。



震々（ぶる　ぶる）

ぶるぶる又ぞゞ神とも臆病神（おくびょうがみ）ともいふ。人おそるゝ事あれば、身戦栗（みせんりつ）してぞつとする事あり。これ此神のゑりもとにつきし也。



骸骨

慶運法師骸骨の絵賛に、かへし見よおのが心はなに物ぞ色を見声をきくにつけても



天井下（てんじょうくだり）

むかし茨木童子（いばらきどうじ）は綱（つな）が伯母（おば）と化（け）して破風（はふ）をやぶりて出（いで）、今この妖怪（ようかい）は美人（びじん）にあらずして天井（てんぜう）より落（おつ）。世俗の誹（ことはざ）に天井見せるといふは、かゝるおそろしきめを見する事にや。



大禿（おおかぶろ）

伝へ聞、彭祖（ほうそ）は七百余歳（さい）にして猶慈童（じどう）と称（せう）す。是大禿（おほかぶろ）にあらずや。日本にても那智高野（なちかうや）には頭禿（かうべかぶろ）に歯豁（はあばら）なる大禿（おほかぶろ）ありと云。しからば男禿（おとこかぶろ）ならんか。



大首（おおくび）

大凡物（おほよそ）の大（おほい）なるもの皆おそるべし。いはんや雨夜（あまよ）の星明（あか）りに鉄漿（かね）くろぐろとつけたる女の首（くび）おそろし。なんともおろか也。



百々爺

百々爺未レ詳。愚按ずるに、山東に摸捫窠と称するもの、一名野襖ともいふとぞ。京師の人小児を怖しめて啼を止むるに元興寺といふ。もゝんぐはとがごしとふたつのものを合せて、もゝんぢいといふ欤。原野夜ふけてゆきゝたえ、きりとぢ風すごきとき、老夫と化して出て遊ぶ。行旅の人これに遭へば、かならず病むといへり。



金霊（かねだま）

金だまは金気也。唐詩に不レ貪 夜識二金銀気一といへり。又論語にも富貴在レ天と見えたり。人善事をなせば天より福をあたふる事、必然の理也。



天逆毎（あまのざこ）

或書ニ云フ。素盞烏尊ハ猛気胸ニ満チ、吐テ一ノ神ヲ為ス。人身獣首、鼻高ク耳長シ。大力ノ神ト雖モ、鼻ニ懸テ千里ヲ走ル。強堅ノ刀ト雖モ、噛ミ砕テ段々ト作ス。天ノ逆毎姫（アマザコ）ト名ヅク。天ノ逆気ヲ服シ、独身ニシテ児ヲ生ム。天ノ魔雄（サク）神ト名ヅクト云云。摸捫窩主人賛



日の出

夫妖は徳に勝ずといへり。百鬼の闇夜に横行するは、佞人の闇主に媚びて時めくが如し。大陽のぼりて万物を照せば、君子の時を得、明君の代にあへるがごとし。

